

せいきょう連ニュース

岡山県生活協同組合連合会 TEL : 086-230-1315 HP : <http://okayama.kenren-coop.jp/>

おかやまコープ主催

コープフェスタ2018 2万人の参加で開催



9月22日(土)、コンベックス岡山にて、おかやまコープ主催のコープフェスタ2018が開催され、全体で2万人の方が訪れ、終日賑わいました。

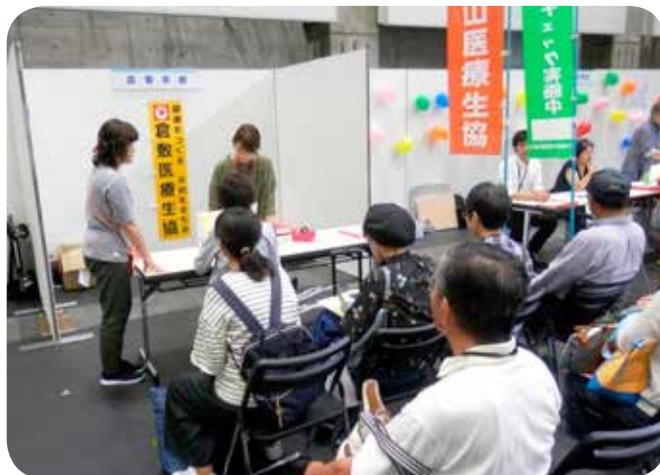


3つの医療生協が健康チェックコーナーなどで参加

岡山医療生協、倉敷医療生協、津山医療生協の県内にある3つの医療生協は、健康チェックコーナーの運営と食育コーナーのすこしお生活のブース出展を行い、多くの方が参加しました。

健康チェックコーナーでは、骨密度測定、足指力測定、血圧・BMI測定、医療生協紹介ブースに加え、今回新しく血管年齢測定と子ども体力測定に取り組んだところ、たいへん好評で、たくさんの参加がありました。また、食育コーナーのすこしお生活のブースでは岡山県栄養士会と連携し、塩分チェックなどに取り組みました。

血管年齢測定のブース



協同組合連絡協議会もブース出展とクイズラリー実施



協同組合連絡協議会では、県生協連、JA岡山中央会、県漁連、県森林組合がそれぞれ、ブースを展開するとともに、協同組合コーナーとして、4つのブースの内容から回答するクイズラリーを実施し、多くの方が参加されました。

県生協連は、SDGs(持続可能な開発目標)をわなげで学ぼう、JA岡山は、米食味ランキング2年連続特Aのきぬむすめの試食、森林組合は、松、杉、ヒノキの展示と干ししいたけの販売、県漁連は、自由に子どもがさわられる生きた魚のタッチプールに取り組みました。

県漁連の魚のタッチプール

西日本豪雨災害

一日も早い復旧、復興を

「晴れの国」と呼ばれる岡山県を襲った7月の記録的な大雨による豪雨災害では、県内で61人の命を奪い、河川の氾濫や土砂崩れによる建物の被害は1万8020棟と、多くの犠牲者を出すとともに甚大な被害をもたらしました。被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。県内の各生協では、発災直後から、生協と自治体との災害時物資協定に基づき、水、食料、日用品など支援物資を7つの自治体へ提供するとともに、倉敷市の災害ボランティアセンターの運営メンバーとして職員を派遣、また、倉敷市の避難所ケアなどの実施や岡山市の



被災地域に救護所を設置するなど、それぞれの生協が役割発揮を行うとともに、全国の生協から倉敷市の災害ボランティアセンターや避難所ケアにたくさんの職員が派遣され奮闘しました。

豪雨災害後に開催された9月定例県議会では、代表質問や一般質問の多くの時間を豪雨災害関連に割き、様々な角度から県の対応や今後の復旧・復興について議論を行いました。県ではいち早く「豪雨災害復旧・復興ロードマップ」

を策定するとともに大幅な補正予算を計上するなど、一日も早い復旧、復興への対策を進める一方、今回の豪雨災害とその対応について、地域防災の専門家で検証委員会を8月に立ち上げ、検証作業を進めています。今後、県生協連と県議会議員との懇談会や行政懇談などの場で今回の大惨事の原因や対応の教訓化などについて意見交換を行っていきます。

岡山県へ「西日本豪雨災害義援金」を贈呈 全国の生協から寄せられた、総額3億円

西日本豪雨災害での甚大な被害に対し、日本生活協同組合連合会の呼びかけで、全国の生協で「西日本豪雨緊急支援募金」が取り組まれました。9月までに5億8千万円の心温まる募金が寄せられ、被害を受けた各府県へ被害の大きさに比例して募金が配分され、岡山県へは2億8,530万9,403円が贈られました。



11月13日(火)に、県庁の知事室にて、義援金贈呈式が行われ、岡山県災害義援金推進本部長の伊原木隆太岡山県知事へ日本生活協同組合連合会の本田英一会長から目録が手渡されました。

また、この日はおかやまコープからも組合員から寄せられた募金から1500万円が県に贈呈され、総額3億円を超える義援金の贈呈となりました。

岡山大学生生活協同組合と三橋幸夫氏が 厚生労働大臣表彰を受賞しました。

今年が消費生活協同組合施行70周年にあたることから、これを記念して、同法の理念にのっとり健全な事業経営を行い、他の模範と認められる消費生活協同組合(連合会)ならびに組合役員の功績をたたえとともに組合の健全な発展に寄与するため、厚生労働大臣表彰が10月30日(火)に厚生労働省で行われました。今回の受賞は全国30生協(連合会)と40人の組合役員となり、岡山県からは、生協表彰に岡山大学生生活協同組合、役員表彰に三橋幸夫氏(前おかやまコープ理事長)が表彰されました。受賞された皆さま、ならびに関係者の皆さまに心よりお祝い申し上げます。



左から2人目が三橋氏

「ヘルスチャレンジ2017」の取り組みが、「おかやま健康づくりアワード2018」(地域部門)で表彰されました。

岡山県では、健康寿命の延伸に向け、健康づくりに熱心な企業や団体を表彰する「おかやま健康づくりアワード」を今年初めて実施しました。9月5日(水)に、岡山県医師会館三木記念ホールで開かれたアワードの式典では、伊原木隆太県知事から、7項目の「健康づくり宣言」が行われた後、「職場部門」と「地域部門」それぞれ5団体の表彰式があり、岡山県生協連の「ヘルスチャレンジ2017」の取り組みが評価され、「地域部門」で表彰されました。近藤清志県生協連会長理事が伊原木隆太県知事から表彰状とクリスタルトロフィーを受け取りました。

昨年の厚生労働省健康局長優良賞(団体部門)受賞に続いて、2年連続の受賞となりました。

「おかやま健康づくりアワード」とは

岡山県内における職場や地域で、健康づくり活動に積極的に取り組み、他の模範となる企業や団体を表彰することにより、その功績を称えるとともに、その活動内容を広く紹介し、県民の健康づくり活動を推進することを目的として実施され、2018年が第1回目です。



第34回 中四国生協・行政合同会議が山口県で開催されました

2018年10月25日(木)、山口県にて、『みんなが安心してらせる地域づくりのための連携と協働』をテーマとして中四国生協・行政合同会議が開催されました。

厚生労働省社会・援護局地域福祉課消費生活協同組合業務室岡河義孝室長から、今年は生協法制定70周年であり、厚生労働大臣表彰も行われること、人口減少、少子・高齢化など地域の変化の中で、住み慣れた地域で住民一人ひとりのくらしや生きがいを創っていく地域共生社会の実現に向けて、生協の地域社会での取り組みが期待されていること、昨年の8月と今年7月に「生協が行う地域福祉の先駆的な取組事例」集を発行しており、全国で参考にしてほしいこと、この事例には、住民と組合員が主体的に実施していることや顔の見える関係であること、自分たちで発見するなどの共通のポイントがあることなどの挨拶がありました。



活動報告は、1行政と2生協が行い、それぞれ特徴的な取り組み報告が行われました。

- ① 「高齢消費者の被害防止に向けた取り組みについて」 山口県環境生活部県民生活課消費生活センター
- ② 「医療生協の地域まるごと健康づくり」 医療生協健文会
- ③ 「おひさまサロンさがの取り組みについて」 生活協同組合コープやまぐち

グループ分散会では、各県ごとを基本に8グループに分かれ、参加した各県行政から報告が行われた後、各県生協連からの報告を受け、「行政と生協との連携・協働を最も必要とする地域課題は何か、連携・協働する上で障害(問題)となること、その解決には」をテーマに、グループ毎、参加者全員で意見交換を行い、課題抽出を中心に行いました。

次回開催県として、香川県生協連の木村誠会長が感想と決意を述べられ終了しました。

第32回岡山県消費者大会17団体213名の参加で開催

10月30日(火)オルガホールにて、第32回岡山県消費者大会が「時代を読み解く、今、伝えたい真実」をテーマに、17団体213名の参加で開催されました。

主催者を代表して岡山県消団連近藤幸夫代表幹事(弁護士)より、県消団連の果たしてきた役割や消費者大会が32回目を迎えたこと、この間、暮らしを守る学習や取り組みを進めてきたことに触れた挨拶がありました。

続いて第一部の講演では、東京新聞社会部記者で、ジャーナリストの立場から、今、日本で起こっていることの実態を伝える講演や執筆活動を精力的に行っている望月衣塑子氏より、「新聞記者の目に見えているもの～今、伝えたい真実～」をテーマに、身振り手振りも交えながら、エネルギー

シユにお話していただきました。メディアの役割は「権力の監視、チェック」であり、新聞記者としての自分のテーマが「権力側が隠そうとすることを明るみに出すこと」と説明がある中、次々と安倍政権下で進んでいる米国製の武器輸入と武器輸出の実態や未だ何が真実かわからない森友問題、加計問題の尽きない疑惑の数々を記者の取材と体験にもとづいた観点から話されました。問われるメディアの役割を自問自答しながらも発揮しようと奮闘する姿や「萎縮してはいられない」とジャーナリストとしての信念を強く貫く姿に感銘を受けるとともに、我々消費者一人ひとりが、政治や社会に関心を持ち、有権者としての一票を行使することが大切であり、必要なことを学びました。

第二部の特別報告では、「西日本豪雨災害への対応と今後の被災者生活支援に向けて」と題して、岡山県社会福祉協議会地域福祉部の吉田光臣副部長より報告していただきました。社会福祉協議会についての説明の後、7月に発災した西日本豪雨災害での岡山県の被災状況

として、住宅被害や避難所開設、仮設住宅入居状況などについて、また、県内の災害ボランティアセンター設置やボランティア活動状況と災害支援の流れなどについて説明がありました。さらに、今後の被災者の生活支援(復興支援)としては、被災者見守りと相談支援体制へ移行していくことや「地域支え合いセンター」を設置して様々な支援を進めていくことなどの報告があり、今後も息の長い協力、支援が必要なことを参加者で共有しました。

最後に、岡山県消団連代表幹事でJA岡山県女性組織協議会の佐野廣子さんより、第32回岡山県消費者大会の大会決議案が提案され、満場一致の拍手で確認された後、終了しました。

【講演の感想から】

- ・メディアは権力に萎縮しないで、真実を報道してほしい。国民には、知る権利があるのだから。
- ・他人まかせではなく、一人ひとりが興味関心を持つことの大切さを感じました。
- ・日ごろ、ニュースや新聞を人並みに見たり読んだりしており、世の中のことを知っているつもりになっていたが、真実に行き着くには高い壁がありますね。ジャーナリストの方々の頑張りに頭が下がる。
- ・日ごろ不安に感じていることをしっかりと聞いてよかった。これで満足せず問題意識を持ち続けたい。
- ・現実、事実に向き合う大切さを学んだ。目をそらせしないで、正しく知ること。自分の立場でできることを探して実践すること、未来に目を向けて着実に歩んでいきたいと思った。



近藤幸夫代表幹事



望月衣塑子氏



吉田光臣副部長



岡山県学校生協

《第8回OTCゴルフコンペに118名参加》



今年の夏は連日の猛暑でOTCゴルフコンペを例年通り開催すべきか真剣に検討しなくてはならない状況でしたが、台風18号の影響で前線が南下するため曇天との予報。主催者側としては猛暑を回避でき一安心、8月16日に予定通り開催しました。



スタート時は曇り、前半を終えるころから強い雨が降り出し、スコアを落とす場面も見受けられましたが、参加者全員何事もなく18ホール回り切り、清々しい面持ちで表彰式に臨まれていました。

三井造船生協

《三井生協家庭会チャリティバザーを開催》

10月13日(土)10時より、40回目となる「三井生協家庭会チャリティバザー」が、すこやかセンターにて開催されました。会場には組合員の皆様の善意でご提供いただいた日用品や食器、衣料品などたくさんの



品物が所せましと並びました。開始時間前から行列ができるほど多くの方にお越しいただき、バザー品を購入して頂きました。

収益金217,710円は、全額玉野市へ寄付し、社会福祉事業の活用に使われていただく予定です。

岡山医療生協

《2018年度前期運営委員研修交流会》

8月18日(土)、前期運営委員研修交流会が、組合員122名の参加で開催されました。

前半では「居場所を作って楽しさ発見!月間」の振り返りや今年の「岡山医療生協強化月間」の提案が行われ、後半では中堅職員による模擬班会を行い、5つのテーマで分科会に別れての班会体験ができました。

参加者からは「和やかに勉強できて良かった」「支部に持ち帰って、みんなでやってみよう」「少し涼しくなり、参加者が多くて良かった。これからも今回のような刺激を受けていきたい」等の声が寄せられています。



《夏休み最後の思い出に「診療所探検」を実施》

8月30日、コープ大野辻クリニックを中心に、子どもたちの夏休み企画を実施しました。

「はかること教室」では岡山市生活安全課から2人の講師を依頼。午後はコープ大野辻クリニックで「診療所探検」を行いました。また、昼食は組合員さんの手作りの料理を楽しみました。

全体では親子で36人の参加があり、夏休み最後に親子で充実した時間を過ごせたと好評でした。



おかやまコープ

《「ヒバクシャ国際署名」4万8千筆集まる》

平均年齢80歳を超えた被爆者が、「何としても核兵器のない世界を実現したい」との思いから、核兵器を禁止し廃絶することを求めて取り組んだ「ヒバクシャ国際署名」は、9月末時点で4万8千筆を超え、目標の3万筆を大きく上回りました。中には、3月30日の「平和のひろば 2018」の川崎哲さんの講演を聞き、賛同した方からお手紙と一緒に届いた署名もありました。各種委員会による店頭や各種企画等で署名を呼びかける取り組みなどが大きな力となり、2020年に開催予定のNPT再検討会議に向け、参加の広がりを作ることができました。



被爆者会や生協連と協力して街頭署名を呼びかけ

《美作市社協と「食の自立支援事業」協力協定を締結》



6月4日、美作市社会福祉協議会と「食の自立支援事業」協力協定を締結しました。同社協から高齢者向け配食サービスへの協力依頼があり、協議を重ね、締結に至りました。同社協とおかやまコープが協同し、大原・東粟倉地域で月～金曜日の平日におかやまコープ夕食宅配「たべてん便」の弁当をお届けしています。



美作市社協山本眞澄会長（左）とおかやまコープ平田昌三理事長が協定書に署名

岡山県労済生協（全労済岡山推進本部）

《「みんなのぼうさいフェスティバル」を開催》

9月1日（土）、コンベックス岡山中展示場にて「みんなのぼうさいフェスティバル」を開催しました。当日は、おかやまコープにもブース出展いただき、約4,000名の方が来場されました。

このイベントは岡山労済生協（全労済岡山推進本部）創立60周年記念事業のひとつとして開催しました。

防災意識を高めるため、ステージショーに加えて体験型のワークショップ、各協力団体・企業によるブース出展を用意し、子どもを中心に楽しみながら防災を学ぶことができるイベントとしました。



津山医療生協

《第26回保健大学で健康づくりを学びました》

9月から10月にかけて、第26回保健大学が行われました。講義は週1回で7つの講座です。目的は健康づくりを学んで地域に保健委員として健康づくりを実践する人づくりです。

今回は7名の組合員が参加し、血圧測定や体脂肪、尿の検査、健康体操などの実技だけでなく「すこしお」の話し、糖尿病の話し、エンディングノートなどの知識も学びました。少し高齢の方も混じっての講座でしたが、みなさん真剣に、時には笑いながら講義を受けていました。



倉敷医療生協

《「班会で楽しくオーラルフレイル予防」講演会に180人余参加》

10月27日に、「組合員活動交流集会&保健大会」を開催しました。「保健大会」は今年で34回目。群馬県の利根歯科診療所の中澤桂一郎所長を講師に「健康寿命延伸のために口の健康づくり」と題して、フレイル予防は美味しく食べることから始まることや、医療生協の班会で楽しくお口のフレイル予防に取り組むための実演など、楽しく学ぶことができました。



岡山大学生協

《クリーンキャンパスの取り組み》

生協学生委員会の主催で、岡山大学のキャンパス内清掃を実施しました。10月21日は鹿田キャンパスで約30名の参加、10月28日は津島キャンパスで約80名の学生組合員に参加して頂きました。当日は短い時間でしたが、空き缶・ペットボトルなど小さなゴミからビニール傘など粗大ゴミの回収、生協店舗前のログテーブルのペンキ塗装など、学内清掃を通じて組合員と学内環境を美化していくことの大切さを考えました。また清掃活動終了後はグループに分かれて、「環境クイズ大会」というゲームも実施し、参加者同士の交流をより深めることができました。



グリーンコープ生協おかやま

《西日本豪雨災害の支援活動》

グリーンコープは被災地に寄り添った支援活動を続けています。

豪雨翌日の7月7日より組合員の安否確認を行い、7月10日には組合員がおにぎり250個を準備し真備町の避難所にお届けしました。

その後、各避難所を訪問し避難所からの要望を受けて支援物資を届けたり、「温かいものが食べたい」との声に応え、組合員が各所で定期的な炊き出しを行い、とても多くの方に喜んで頂きました。

また、被災された方が新しい生活をスタートされる際に、少しでもお役に立てればという組合員の思いから、

避難所を退所される方に生活応援セットをお届けしています。



就実生協

《第3回お菓子総選挙をしました》

学生たちに人気のお菓子！季節ごとに新商品や期間限定の商品が発売されるため、どの商品が人気か？食べたくなるのか？発注担当者が気になることを、学生組合員の声を直接聞こう！と、実際に試食をしてもらって投票をしてもらおうお菓子総選挙をseedS（生協学生部）が行いました。今年で3回目の実施です。

メーカーさんから提供してもらったサンプルも活用し、試食は通りがかりでも参加しやすいようにお昼休みの時間を中心に、約300人の学生さんが参加しました。

投票結果は、お店の品ぞろえに活用するとともに、人気の上位の商品はseedSが作ったPOPも活用し、期間限定で10%OFFにて提供を行い多くの学生組合員に喜ばれました。



食べていただくことが石巻の水産復興につながる

石巻の水産業者たちが、震災後、石巻市水産復興会議という組織を立ち上げ、一丸となって、真っ先に行なったのは冷蔵庫にあった製品の廃棄処理でした。各社から人が出て「今日はこの会社の冷蔵庫、明日はこの会社の冷蔵庫」と振り分けし、3カ月かけて処理しました。

「海があり、船があれば漁はできる。仮設の魚市場が建てば水揚げができる。しかし加工場がなければ出荷はできない。そこで加工場の冷蔵庫に残っていた製品を全部捨て、受け入れ環境を整えることから始めたんです」。渡波水産加工業協同組合の木村安之専務理事は、当時をそう振り返ります。

また渡波水産加工業協同組合は、国の補助を受けてすぐに冷凍冷蔵施設と製氷施設を復旧させ、組合員（水産加工業者）が氷の手当てや冷凍冷蔵庫の保管を心配することなく事業再開に打ち込めるようにしました。

一方で壁にも突き当たりました。「消費者の方々に宮城の水産物をたくさん食べてもらわなければならないのに、原発事故による風評被害が起きて不安だった」と話します。さらに組合員の間では施設整備に伴う二重ローン問題も浮上し、不安は増大しました。



木村安之専務理事（右）と菅原正浩参事。「時代の変化に対応していくには消費者の方々との交流が大切で、それが個々の組合員の経営維持につながる」と話します。

しかし震災から3年後に組合の青年部が活動を再開。交流する中で様々な意見が出てくるようになりました。木村さんはそこに希望を見ます。「水産加工は練り製品や塩蔵品など業種が多様で、他の工場の実情を知らない。だが青年部の活動で工場を行き来すれば作業内容なども自然とオープンになる。それが互いに刺激になる。議論が生まれ、行動に移していくこともできるようになった」。

同組合は食育などのPR活動に取り組む一方で、消費者の声を聴きに行くことを今後の課題にしています。

「消費者の方々が何を求めているかを知り、さらに交流を通して我々の製品の良さを伝えていきたい」と木村さん。「消費者の方々に石巻の水産加工品をたくさん食べていただくことが復興につながる。PR活動と交流に取り組み、組合員の経営に貢献していきます」。

同組合の組合員は現在36社。その思いを反映した運営と新たな試みとのバランスを取りながら、復興の道をたどっています。

縁をつないでいく南三陸町の商店街

2012年に仮設商店街として営業を始め、昨年、場所を移転し本設商店街として新たなスタートを切った南三陸さんさん商店街（志津川地区）。オープンから1年5カ月目の2018年8月、来場者が100万人を突破しました。本設移転の前に抱いていた様々な不安をかき消すかのように、商店街には晴れやかな気分が広がっています。

㈱南三陸まちづくり未来（以下まちづくり未来）の菊地真人常務は、「たくさんのメディアが取材に来て伝えてくれた。さらに震災直後から支援してくださっていた方々が友人や親せきを連れて来たり、中高生が体験学習で訪れたり、旅行会社が商店街に立ち寄るツアーを企画したり、多くの縁のおかげで、短い期間で100万人ものお客様をお迎えできた」と話します。

ハマレ歌津（歌津地区）も、復興支援で来ていた人たちが引き続き観光で訪れています。現在道路工事のためアクセスが分かりにくくなっていますが、まちづくり未来では看板を設置して商店街への誘導を図ろうと考えています。

海・山・里の豊かな自然に恵まれた南三陸町は、震災前から観光交流に力を入れていました。震災以降は、商店街が町のメイン施設として観光交流をけん引しています。人口減少が課題となっているなか、交流人口の拡大を担う商店街には大きな期待が寄せられています。

「さんさん商店街とハマレ歌津の2カ所に寄っていただいたお客様に何か特典を差し上げるなど、色々企画を練っているとところです」と菊地さん。ホームページやツイッター、会員向けメールマガジンなどを駆使し、情報を発信しています。またミニコンサートなど、来場者の持ち込み企画イベントが多いのも、2つの商店街の特徴です。それだけに菊地さんはじめ商店街の人たちには「支援していただいた方々やお客様との縁を大切にしていかなければならない」との思いが強くあります。

2、3年後にはさんさん商店街のそばに道の駅ができる予定です。旧防災庁舎を含む復興祈念公園の開園も控えています。「新しい施設ができることで人の流れも変わるでしょう。その時、さんさん商店街とハマレ歌津はどういう役割を担うべきか、色々提案をしていこうと考えています」と菊地さんは言います。

震災時の困難を大勢の人々と縁をつなぐことで乗り越えてきた南三陸町の商店街。これからも縁を大切にしながら、変化する町と時代に対応していこうとしています。



名物キラキラ丼ののぼりがはためくさんさん商店街。学生や社会人のグループ、家族連れなどで賑わっています。